The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Cross-Indexing Viewからみた中央アラスカ・ユピック語の人称接辞に関する一考察
Author(s)	田村, 幸誠
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85031
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Cross-Indexing View からみた中央アラスカ・ユピック語の人称接辞に関する一考察

田村幸誠
（大阪大学）

1. はじめに

まず、次の (1) に示した、Siewierska による「人称代名詞から一致のマーカーへの文法化」の記述をみてみよう。

(1) "The endpoint of the historical evolution of agreement marker from person pronoun is the loss of referentiality on the part of the person marker and the obligatory presence of the nominal argument with which it agrees." Siewierska (1999: 225)

例えば、英語の *He speaks English.* において、一般に、*he* は人称代名詞 (personal pronoun) で、*speaks* の *-s* は、一致 (agreement) のマーカーであると分類される。世界の 200 以上の言語を観察した Siewierska は、通言語的な特徴を踏まえた 1 つの文法化の道筋として (1) のことを提案している。つまり、世界の言語に共通して観察される傾向として、*he* のような人称代名詞は、やがて、*-s* のような一致のマーカーに文法化していくというものである。

Siewierska によるこの「人称代名詞から一致のマーカーへの文法化」は、通言語的に妥当な観察とみなされる一方で、類型論の分野において、何を「人称代名詞」とみなし、何を「一致のマーカー」とみなすかに関して新たな議論を呼ぶことになった (e.g. Corbett (2006); Dixon (2010))。例えば、次の (2) の文を観察してみよう。グルジア語 (Georgian) では、'I eat it.' という意味における、主語と目的語の関係が (2a) で分かるように、動詞の人称接辞で表され、*V-Ø-č'am* という 1 つの動詞で 1 つの文が成立している。加えて、(2a) は (2b) のように、主語と目的語を代名詞を伴った形でも表現することが出来る（動詞の形には変化がないことに注意されたい）。

(2) グルジア語 (Georgian, a Kartvelian; Boeder 2002: 98-99; cited from Haspelmath (2013: 197))

a. *V-Ø-č'am.*
1.SUBJ-3.OBJ-eat
'I eat it.'

b. *Me* *V-Ø-č'am* *ma-s.*
I 1.SUBJ-3.OBJ-eat it-DAT

(2) における人称接辞、*-V*-(1.SUBJ) と *-Ø-* (3.OBJ) は、通常の基準では代名詞とは呼べるも

のではない。それは、動詞の接辞（拘束形態素）として、動詞の一部に現れており、例えば、英語の代名詞の *he* や *it* のように自由形態素として振る舞い、かつ、名詞（句）の代わり (*pro-noun*) として機能するものではないからである。また、同時に、-*V*-(1.SUBJ) と-Ø-(3.OBJ) は、通常の基準では、一致のマーカーと呼べるものでもない。それは、(2a) と (2b) が示すように、先行詞 (controller) として働く名詞句の存在が、例えば、英語の一致現象 (e.g. *John/He speaks English*; **speaks English*.) のように、同一節内において義務的ではないからである。

(1) の文法化現象との関係で、特に興味深い事実は、Siewierska (1999) によれば、動詞の人称接辞に関して、世界の言語の中で (2) のグルジア語のようなパターンを示す言語が最も一般的に観察されるタイプで、英語のように同じ節に動詞の人称接辞の先行詞が義務的に伴なう必要のある言語は、全体の 3%程と、極めて稀であるということである（Siewierska (1999), cf. Haspelmath (2013:210))。Haspelmath (2013) は Siewierska (1999) の大規模な記述調査を受けて、(1) の文法化の根底にある認知的な原理として、double-expression view という考え方を人称接辞に用いることを提案している。また、Siewierska も後に、Siewierska (2011:334) において、double-indexation analysis と呼ぶほぼ同じ考えを提案している。本論文では、以下において、double-expression view と double-indexation analysis を cross-indexing view という用語に統一して用いる。

本論文では、次節において、(1) を前提とした Haspelmath (2013) の人称接辞に関する議論のポイントをまとめ、その上で、3 節でその考え方を中央アラスカ・ユピック語 (Central Alaskan Yup'ik, an Eskimo-Aleut; 以下 CAY と記す) の関連事例に応用することを試みる。3.1 節では、cross-indexing view が CAY の一致現象の実態に上手く機能することを考察する。さらに、3.2 節では、一致に関する cross-indexing view という認知的な原理が、動詞人称接辞と項の一致という局所的な現象を超えて、意味的格によってマークされる CAY の場所表現の意味解釈にも機能していることを指摘する。4 節は結語とする。

2. Haspelmath (2013) の論考と争点

では、Haspelmath (2013) の論考のポイントをまとめることにしよう。Haspelmath (2013) は、(1) の文法化で見られる人称接辞の段階を、(I) Gramm-Indexes、(II) Cross-Indexes、(III) Pro-Indexes という 3 つの段階に大きく分けている。次の例文 (3) から (5) は、各段階からそれぞれ 1 つづつ例を取り出したものである。まず、(3) は、Haspelmath が Gramm-Indexes と呼ぶタイプのもので、特徴は動詞の人称接辞が項名詞句と共起することが義務的なことである。(3a-c) の最後の括弧にあるように、項名詞句が具現化されていない場合、非文となるタイプである。

(3) Gramm-Indexes （項名詞句との共起が義務であるタイプ）

ドイツ語 (German; Haspelmath (2013: 206))

a.	*Ich komm-e*	'I come'	(**komm-e*)
b.	*du komm-st*	'you come'	(**komm-st*)
c.	*sie komm-t*	'she comes'	(**komm-t*)
d.	*Elli komm-t*	'Elli comes'	

(cf. 英語：*Mary come-s*; *she come-s*; **come-s*)

次に、(4) は (上の (2) も)、Haspelmath が Cross-Indexes と呼ぶタイプのもので、特徴は

動詞の人称接辞が項名詞句と共起することが随意的で、先行詞 (controller) が同じ節になくても成立するタイプの人称接辞である。上の (2) と同様に、(4) において全く同じ動詞、*Gan-angu* (3SG.3SG-handle) が２つの文で用いられていることに注意されたい。上でも述べたが、このCross-Indexesタイプが世界の言語で最も多く観察されるものである (cf. Siewierska (1999, 2011))。また３節で扱う CAY もこのタイプに属する（今節例文 (8) を参照）。

(4) Cross-Indexes （項名詞句との共起が随意的であるタイプ (例文 (2) はこのタイプ)）
ジャミンジュング語 (Jaminjung, a Mirndi; Schultze-Berndt (2000: 154), cited from Haspelmath (2013: 207))

a. *Gan-angu* *warrag.*
3SG.3SG-handle catfish
'(S)he caught a catfish.'

b. *Nalyarri-ni* *Gan-angu* *warrag.*
Nalyarri-ERG 3SG.3SG-handle catfish
'Nalyarri caught a catfish.'

最後に、(5) は Haspelmath が Pro-Indexes と呼ぶタイプのもので、特徴は動詞の人称接辞が項名詞句と共起することが出来ないタイプのものである。(5a) において、主語 *Àde* がある場合、動詞に人称接辞が接続されておらず、また、(5b) のように、主語が項名詞句で明示されていない場合に、人称接辞が現れているのを確認されたい。

(5) Pro-Indexes （項名詞句との共起が不可能であるタイプ）
オコ語 (Oko, a Benue-Congo; Atoyebi (2010:87), cited from Haspelmath (2013: 208))

a. *Àde* *cìna* *óbín*
Ade become king
'Ade has become a king.'

b. *È-cìna* *óbín*
3SG.SUBJ-become king
'He has become a king.'

c. **Àde* *è-cìna* *óbín*

問題は (3) から (5) にみられる人称接辞と先行詞 (controller) の関係に関してどのような一般化、及び説明がなされるのかということにある。Haspelmath (2013)、そして Siewierska (2011) が共通して指摘する先行研究の問題点は、(3) から (5) にみられる分布を「一致」あるは「代名詞」のどちらかに押し込めて、統一的な記述を図ろうとすることにあるという。まず、「一致」の方から始めると、これは Haspelmath (2013: 209-210) が virtual agreement view と呼び、Siewierska (2011: 333) が agreement analysis と呼ぶもので、「一致」を拡大解釈して全体の分布を捉えようとするものである。つまり、(3) のタイプをモデルに、(4) と (5) のタイプにみられる人称接辞も同じ様に分析するものである。この分析の問題点は、例えば、(4a) (や (5b)) の人称接辞の存在を動機づけるために、実際には存在しないにも関わらず、架空の (virtual) 項名詞句（この場合は主語項）が存在すると仮定する必要があることである。まず、広く認知言語学 (Langacker 1991; 2008) の立場にたてば、説明のために「音」という実態を伴

わない理論的構築物を設定することは content requirement の違反であり、説明としては成立していないとみなされる。加えて、上でも述べたが、全体でヨーロッパの言語を除いてほとんど観察されない (3) のパターンをモデルに、最も多く観察される (4) のタイプを「架空の項」を立ててまで説明しようとすることもある。客観的な言語の類型を捉えたい類型論において、この説明は自分たちの慣れ親しんだ発想を他の言語に当てはめた分析に過ぎないという危惧が強く残り、通言語的に説得力のないヨーロッパ中心主義的な分析とみなされる（Haspelmath (2013: 210) cf. Shibatani 2021; もう一つの理論的な問題は下で触れる）。

次に、「代名詞」の解釈を拡大し、(4a) や (5b) にみられる人称接辞を「代名詞」としてみなす考え方である (Haspelmath (2013: 210) は bound-argument view と呼び、Siewierska (2011: 333) は pronominal argument analysis と呼んでいる)。つまり、(4) や (5) に観察される人称接辞を拘束形態素であるけれども、理論的には、(3) における（自由形態素の）代名詞と同じようにみなすべきだというものである。この考え方は下の (6) や (7) の言語をモデルに想定されたものと考えられる。

(6) ラコタ語 (Lakhota, a Siouan; Siewierska (2011:333))

Miyé	*mathó*	*ki*	*Ø-wa-kté*
I	bear	the	3SG-1SG-kill

'I killed the bear.'

(7) ナバホ語 (Navajo, an Athabaskan; Willie (1989:415))

'atééd	*yizts'ǫs*
girl	3SG.OBJ:3SG.SUBJ:kiss

'He kissed the girl/The girl kissed him.'

(6) と (7) において、動詞に主語・目的語の関係が人称接辞で示され、かつ、名詞には格表示等がないことに気づかれたい。この特徴を根拠に、ラコタ語やナバホ語において、動詞の項が表示されるところは動詞の接辞であり、(6) の *Miyé* (I) や *mathó ki* (the bear) 、また (7) の *atééd* (girl) は項名詞ではなく、不加詞 (adjunct) であるという主張がなされる。

しかし、Haspelmath そして Siewierska のどちらもが指摘しているように、人称接辞を動詞の項としてみなすために、そのように名詞句を一様に不加詞とみなすことは通言語的に支持が得られないものとなる。例えば、下の (8b) の CAY では、主語と目的語どちらの名詞句も格表示が必ず伴なうものでなければならない（実際、(4b) でも名詞句に格表示が与えられている）。つまり、先行詞 (controller) なしの人称接辞を動詞にマークすることと、表出した項名詞句が格等の表示を受けない（あるいは受ける）ということの２つの文法現象には通言語的な相関関係は恐らくないと考えられる (cf. Nichols (1986) による head-marking と dependent-marking の議論).

(8) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. *Nunu-lar-a-a.*
scold-always-TR.IND-3SG.3SG
'He/she always scolds him/her.'

b. *Aata-mta* *qimugte-put* *Nunu-lar-a-a.*

father-1PL.ERG　　dog-1PL.ABS　　scold-always-TR.IND-3SG.3SG
'Our father always scolds our dog.'

代わって、Haspelmath (2013: 212) と Siewierska (2011: 334) は、上でも述べたが、cross-indexing view という考えを提案する。従来の「一致」か「代名詞」かという理論的にどちらかに振れる分析の根本原因に、項の表示される文法的位置が１つの節内に１箇所であるという (functional bi-uniqueness; "only one syntactic argument per semantic referent in a clause" (Siewierska 2011:333); "the expectation that arguments should not be expressed twice" (Haspelmath 2013:212)) 考えが背景にあるからだという。しかし、Haspelmath (2013: 212) と Siewierska (2011: 334) によると、まず、その想定の理論的根拠は、１つの形式（項）が複数の異なる指示物 (referent) を指示することによって生じる論理的な矛盾を防ぐためのものであって、１つの指示対象が２つの形式で協調して表示されることを妨げるものではないという。その上で、人称代名詞（項名詞句）、人称接辞ともに単独で指示物 (referent)を指示することが出来、また、同じ節内でこの２つが生じることのできる言語では、片方が片方のコピーであるわけではなく、この２つが協調しあって、談話上の１つの指示物を照合しているという見方を Haspelmath (2013: 212) と Siewierska (2011: 334) は新たに類型論的な枠組みとして提案している。

１節の最後で述べたが、この考え方を Hapelmath は double-expression view と、Siewierska は double-indexation analysis とそれぞれ呼んでいる。本稿において、用語名を cross-indexing view と統一した理由は、上で述べたように、人称形式 (personal forms) は人称代名詞、人称接辞に関わらず、(i) 独立して指示物を指示できると仮定されていること、そして、(ii) ２つの形式は、「一致」の理論で想定されているような非対称的な関係でないこと、最後に (iii) （次節で確認するように、）項名詞句と人称接辞は（同一の）対象物の指示に関して相互補完的な機能を果たしていると考えられるからである。

3. Cross-Indexing View からみた中央アラスカ・ユピック語の特徴

この Cross-Indexing View に基づく人称接辞の考え方は、先にも触れたが、通言語的に最も多く観察されるタイプの (4) を理論的な例外として、あるいは、余分な理論的構築物を仮定せずに説明できる点において大変魅力的である。一方で、Haspelmath (2013) と Siewierska (2011) においてほとんど議論されていないことは、そのような見方を通言語的に仮定した場合、では、個別言語の分析にどのような利点をもたらすのかということである。本節では、3.1 節で CAY の一致現象、特に、項名詞句と人称接辞による（同一の）対象物の指示に関する相互補完的な機能を観察することで、Cross-Indexing View という通言語的概念が個別言語の理解を深めるものになることを示す。そして、3.2 節では、CAY の一見複雑にみえる場所格の解釈にも Cross-Indexing View という考えが応用できる可能性があることを指摘する。この考察の意図は、Cross-Indexing View という認知的原理が項名詞句と動詞の人称接辞との間で妥当なものとして機能するのであれば、その局所的な関係を超えても機能しているはずであると考えるからである。(CAY の代表的な記述文法書に Jacobson (1995) 及び、Miyaoka (2012) がある。CAY の人称接辞の指示性 (referentiality) を扱った論考に Mithun (2003) があり、エスキモー諸語全体にわたる人称接辞の特徴を議論したものに Fortescue (1995) がある。CAY の詳しい文法等の情報はこれらの参考文献を是非参照されたい((Tamura (2019) により詳しい文献情報がある)。また本論文における CAY の例は CAY 母語話者の Caan Topetlook 氏の

協力により得たものである。)

3.1. Cross-Indexing View からみた CAY の一致現象

では、Cross-Indexing View を個別言語の記述に取り入れていくことの利点を考察していくことにしよう。上の例文 (8：下に再掲) で示したように、CAY は (4) と同じ Cross-Indexes の特徴を示すことを確認されたい。(8a) にあるように、*Nunu-lar-a-a* という人称接辞を伴う動詞 1 つで、'He/she always scolds him/her.' という意味を表す文が成立し、また、(8b) のように、*Nunu-lar-a-a* は、具体的な項名詞句を伴って文を作ることも出来る（かなり強調するコンテクストを除いて、代名詞通常は用いられず、コンテクストで指示対象物が分かっている場合、(8a) の表現が最も自然な発話となる)。

(8) CAY (Caan Topetlook, a speaker) （＝再掲）

a. *Nunu-lar-a-a.*
scold-always-TR.IND-3SG.3SG
'He/she always scolds him/her.'

b. *Aata-mta* *qimugte-put* *Nunu-lar-a-a.*
father-1PL.ERG dog-1PL.ABS scold-always-TR.IND-3SG.3SG
'Our father always scolds our dog.'

CAY の文法の特徴として、他動詞の場合、動詞に A 項と O 項の人称・数の情報が義務的に表示され (e.g. -a (3SG.3SG) in (8))、また自動詞の場合は、(9) のように S 項の人称・数の情報が動詞に人称接辞として義務的に付加される必要がある。(9) において、主語 (S 項) の数と動詞の人称接辞の数が同じであることを確認されたい。(エスキモー諸語において、数 (number) には、単数、双数、複数の区別がある。また、文法性 (gender) の表示はない)。

(9) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. *Mikelnguq(ø)* *Quuyuni-u-q.*
child.3SG.ABS smile-INTR.IND-3SG
'The child is smiling.'

b. *Mikelnguu-k* *Quuyuni-u-k.*
child-3DU.ABS smile-INTR.IND-3DU
'The two children are smiling.'

c. *Mikelnguu-t* *Quuyuni-u-t.*
child-3PL.ABS smile-INTR.IND-3PL
'The children are smiling.'

項名詞句の数と動詞の人称接辞によって表される数が「一致」するという特徴を踏まえて、さらに例文 (10) と (11) を比較してみよう。(10a) において、所有される「子供」が単数であり、それは、*-a(ø)*という人称接辞で表され、動詞もそれを受けて、「笑った」人が単数であることが示されている。同様に、(10b) では、所有される「子供」が複数であり、それは、*-i(ø)*という人称接辞で表され、動詞もそれを受けて、「笑った」人が複数であることが示されている。

(10) CAY (Caan Topetlook, a speaker; note: “irniar-“ indicates a biological child.)

a. *Angute-m* *irniar-a(ø)* *quuyuni-u-q.*
man-3SG.GEN child-3SG.3SG.ABS smile-INTR.IND-3SG
‘The man’s child is smiling.’

b. *Angute-m* *irniar-i(ø)* *quuyuni-u-t.*
man-3SG.GEN child-3SG.3PL.ABS smile-INTR.IND-3PL
‘The man’s children are smiling.’

一方、(11) において、(11a) では「笑った」人が単数で、(11b)では「笑った」人が複数で表示されており、解釈（訳）もその違いを表すものになっている。しかし、注目されたいのが、主語 (S 項) が (11a) と (11b) とで、*irnia(r)-puk* と、どちらも全く同じ形をしていることである。(紙幅の関係上、CAY における全ての人称・数の組み合わせを示すことが出来ないが Fortescue (1995) および、上で示した包括的な文法書を参照されたい。) つまり、項名詞句の *irnia(r)-puk* だけでは笑った子供の数が単数なのか複数なのかが特定できないケースが存在するのである。

(11) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. *irnia(r)-puk* *quuyuni-u-q.*
child-1DU smile-INTR.IND-3SG
‘Our child is smiling.’ (our = we, two)

b. *irnia(r)-puk* *quuyuni-u-t.*
child-1DU smile-INTR.IND-PL
‘Our children are smiling.’ (our = we, two)

(c. *irnia(r)-egpuk* *quuyuni-u-k.*
child-1DU.3DU smile-INTR.IND-3DU
‘Our two children are smiling.’)

さらに、例文 (12) と (13) を比べてみよう。(12) において、1 人称単数主語 (A 項) が単数の人に「会った」場合は、*-(ø)qa* という動詞人称接辞で、また、複数の人に「会った」場合、*-nka* という動詞人称接辞でその違いが示されている。これを合わせて目的語 (O 項) である「先生」が単数と複数でそれぞれマークされていることを確認されたい。

(12) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. *Pairte-llru-a-(ø)qa* *imuna* *elitnaurista(ø)* *kipusvig-mi.*
see-PAST-TR.IND-1SG.3SG that.3SG.ABD teacher.3SG.ABS store-LOC
‘I saw that teacher at the store.’

b. *Pairte-llru-a-nka* *imukut* *elitnauriste-t* *kipusvig-mi.*
see-PAST-TR.IND-1SG.3SG that.3PL.ABS teacher-3PL.ABS store-LOC
‘I saw these teachers at the store.’

では、(13) はどうであろうか。(13a) と (13b) において、意味が異なるにも関わらず、動

詞が全く同じ形をしていることに注目されたい。つまり、動詞 *Pairte-llru-a-put* のみでは、「会った」人の数が単数か複数かが判断できないのである。もちろん (13a) と (13b) の解釈の違いは目的語（O 項）が単数でマークされているか、複数でマークされているかの違いによって生じている。

(13) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. *Pairte-llru-a-put* *imuna* *elitnaurista* *kipusvig-mi.*
see-PAST-TR.IND-1PL3SG that.3SG.ABD teacher.3SG.ABS store-LOC
'We saw that teacher at the store.'

b. *Pairte-llru-a-put* *imukut* *elitnauriste-t* *kipusvig-mi.*
see-PAST-TR.IND-1PL3PL that.3PL.ABS teacher-3PL.ABS store-LOC
'We saw these teachers at the store.'

興味深い点は、先の (11) においては、解釈として得られる数の違いを明確にしたのが動詞の人称接辞であり、(13) において、数の違いを明確にしたのが項名詞句の数表示であるという事実である。

前節において、Haspelmath (2013) と Siewierska (2011) による Cross-Indexing View の特徴が項名詞句と動詞の人称接辞が各々独立して談話上の 1 つの指示物を指示し、照合する形で数が特定されることにあるということ述べた。(11) と (13) の例は、数の最終的な特定が項名詞句あるいは動詞の人称接辞、どちらからでもなされる可能性があることを示唆しており、両者が「文法的な一致」で議論されるような非対称的な関係、片方が片方をコピーする関係になっていないことを表していると考えられる。むしろ、項名詞句からの数の情報と動詞の人称接辞からの数の情報が照合される形で最終的な数の解釈が生じていると考えるほうが自然であると言える。まとめると、CAY において、前節 (3) のヨーロッパ言語的な「一致」という概念を項名詞句と人称接辞の関係に求めることは適切ではなく、Cross-Indexing View として考えるほうが適切であるとみなすことが出来る。例えば、Jacobson (1995) の記述文法書では「一致現象」の複雑な例として (11) や (13) の例が記述される傾向があるが、通言語的な枠組みとして提案された Cross-Indexing View つまり、名詞句（項）を人称接辞は、それぞれ独立して指示することが出来、「一致」はその照合の結果であるという見方を取り入れた記述をする方がより分かりやすく CAY の人称接辞の特徴が捉えられると考えられる。

3.2. Cross-Indexing View からみた CAY の場所指示の特徴

Cross-Indexing View が 1 つの認知的な原理である場合、それは項名詞句と人称接辞の関係以外のところにも観察されるはずである。(恐らく様々な言語現象を動機づけていると考えられるが、) ここでは CAY によく観察される特徴的な場所表現を Cross-Indexing View の観点から考察してみたい。次の 2 つの例を考察されたい。

(14) CAY (Caan Topetlook, a speaker; Jacobson (1995:120, 143 の例を参考にして母語話者に確認したもの)

a. *Nasaurlu-um* *nalke-llru-a* *una* *kayanguq*
girl-3SG.ERG find-PAST-(TR.IND)-3Sg.3SG this.ABS egg.3SG.ABS
[*nunapig-mi*] [*navacuara-am* *kelua-ni.*]

tundra-LOC small.lake-GEN the.area.behind-LOC
Lit. The girl found this egg [in the tundra] [in the area behind the small lake.]

b. *Eke-llru-a-qa* *kuvya-qa*
put-PAST-TR.IND-1SG.3SG fishnet-1SG
[*kiavet* *yaassiig-mun*] [*estuulu-an* *acia-nun*.]
there box-DIRECT table-3SG.GEN space.under-DIRECT
Lit. I put my fishnet [in the box there (toward.away.from.the exit)] [in the under space of his table.]

(14a) では場所格 (LOC) が２つ並ぶ形で「少女が卵を発見した」場所が、(14b) では方向格 (DIRECT) が２つ並ぶ形で「魚とり網が置かれた」場所が示されている（２つの句の語順はひっくり返っても構わない)。日本語や英語の感覚で考えると、１つの節で場所格や方向格が２つ使われる場合、片方が参照点 (reference point/landmark) として機能することでサーチドメイン (search domain) を提供し、その中で片方 (target) をより精緻化した形で特定するというのが一般的であると考えられる (cf. Levinson (1996:356))。ここで考えたいことは、果たして (14a,b) に観察される２つの場所表現もそのような非対称的な関係として理解できるのかとうことである。確かに、(14a) は「その小さい湖の裏のツンドラで」と、そして、(14b) は「その部屋の奥にある彼のテーブルの下の箱」と同じ場面を表現することは出来る。しかし、(14a) では、「そのツンドラで」「その小さな湖の裏で」（または「その小さな湖の裏のそのツンドラで」）という様に、また (14b) では、「（部屋の奥にある）その箱に」「そのテーブルの下に」という様に、２つの定表現が同じ格表示を並べる形で同格として表現されているのである（日本語や英語に訳す際に (14) に比べて迂言的に訳出する必要がでるのはそのためであると考えられる)。

Cross-Indexing View のポイントは、１つの同じ指示物を２つの表現が独立して指示し、照合して理解するということにあった。また、3.1 ではその機能における相互補完的特徴を考察した。項名詞句と人称接辞の関係と同じ様に、(14) において、参照点構造による、非対称的な関係を前景化した理解というよりも、場所や方向の２つの句が独立して場所や方向を指示し、それらを相互補完する形で照合して指示対象となる場所や方向を同定するという方略を取っていると考えた方が形式的特徴にも合致するように考えられる。もちろん、この点に関しては今後もう少し調査を進める必要がある。しかし、通言語的分析をすすめる上で単純な参照点による分析以外の可能性を深めなければならない分野であると考えられる。

4. 結語

本論文では、まず、Siewierska (1999) による通言語的な「人称代名詞から一致のマーカーへの文法化」を紹介した上で、その文法化を動機づけるには、Cross-Indexing View という人称接辞に対する新たな考え方が必要であるという Haspelmath (2013) の類型論的主張を考察した。3.1 節で CAY の一致現象、特に、項名詞句と人称接辞による（同一の）対象物の指示に関する相互補完的な機能を観察することで、Cross-Indexing View という通言語的概念が個別言語の理解を深めるものになることを示した。また、3.2 節では、英語や日本語の観点からは理解しにくい CAY の場所表現が、非対照的な参照点構造による関係ではなく、対称的な関係を前提とする Cross-Indexing View による機能が関与しているからではないかと指摘した。

参考文献

Atoyebi, Joseph Dele (2010) *A Reference Grammar of Oko*, Cologne, Rüdiger Köppe Verlag.

Barlow, Michael (1988) *A Situated Theory of Agreement*, New York, Garland Press.

Barlow, Michael (1999) "Agreement as a Discourse Phenomenon," *Folia Linguistica* 33(1-2), 187-210.

Boeder, Winfried (2002) "Syntax and Morphology of Polysynthesis in the Georgian Verb," *Problems of Polysynthesis*, edited by Nicholas Evans and Hans-Jügen Sasse, 87-111, Berlin, Akademie Verlag.

Corbett, Greville G. (2006) *Agreement*, Cambridge, Cambridge University Press.

Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory vol. 1: Methodology*, Oxford, Oxford University Press.

England, Nora C. (1983) *A Grammar of Mam, a Mayan Language*, Austin, University of Texas Press.

Fortescue, Michael (1995) "The historical source and typological position of ergativity in Eskimo languages," *Études/Inuit/Studies*, Vol. 19, No. 2, 61-75.

Haspelmath, Martin (2013) "Argument Indexing: A Conceptual Framework for the Syntactic Status of Bound Person Pronoun," *Languages across Boundaries*, edited by Dik Bakker and Martin Haspelmath, 197-226, Berlin, Walter de Gruyter.

Jacobson, Steven A. (1995) *A Practical Grammar of the Central Alaskan Yup'ik Eskimo Language*, Alaska Native Language Center, Fairbanks.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar vol.2: Descriptive Application*, Stanford, Stanford University Press.

Langacker Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford, Oxford University Press.

Levinson, Stephen C. (1996) "Language and Space," *Annual Review of Anthropology* 25, 353-382.

Mithun, Marianne (2003) "Pronouns and Agreement: Information Status of Pronominal Affixes," *Transactions of the Philological Society* 101(2), 235-278.

Miyaoaka, Osahito (2012) *A Grammar of Central Alaskan Yupik (CAY)*, Berlin, Mouton de Gruyter.

Nichols, Johanna (1986) "Head-Marking and Dependent-Marking Grammar," *Language* 62:1, 56-119.

Schultze-Berndt, Eva (2000) *Simple and Complex Verbs in Jaminjung: A Study of Event Categorization in an Australian Language*, Ph.D. Dissertation, Katholieke Universiteit Nijmegen.

Shibatani, Masayoshi (2021; in press) "Language Typology," *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, edited by Mark Aronoff, Oxford, Oxford University Press.

Siewierska, Anna (1999) "From Anaphoric Pronoun to Grammatical Agreement Marker: Why Objects don't Make it," *Folia Linguistica* 33(1-2), 225-252.

Siewierska, Anna (2011) "Person Marking," *The Handbook of Linguistic Typology*, edited by Jae Jung Song, 322-345, Oxford, Oxford University Press.

Tamura, Yuki-Shige (2019) "Nominalization in Central Alaskan Yup'ik," *Nominalization in Languages of the Americas*, edited by Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck, 273-300, Amsterdam, John Benjamins.

Willie, Mary A. (1989) "Why there is nothing missing in Navajo relative clauses," *Athapaskan Linguistics: Current Perspectives on a Language Family*, edited by E.-D. Cook and K. Rice, 407–437, Berlin, Mouton de Gruyter.